

# ブータン王国の諸言語について —言語多様性の現状と課題：Lhokpu 語を例に—

西田文信

東北大学高度教養教育・学生支援機構

## I. はじめに

筆者の専門領域は言語学であり、漢藏語族 (Sino-Tibetan Language Family) 諸語を研究対象としてきている。この語族の祖語 (proto-language) 再建の為に、漢語諸方言の研究 (特に粵語) と同時に中国四川省のナムイ語、チュユ語及びブータン王国で話されているチベット=ビルマ語派 (Tibeto-Burman Languages) 諸言語の記述 (音韻・形態・統語) と歴史 (主に音韻変化) の解明を目的とした研究を行ってきている。フィールドワークを手法とする記述言語学・言語類型論・歴史言語学 (比較言語学・言語接触論) からこれらの諸言語を検討してきている。本稿では、ブータン王国諸語を概観した後、言語多様性の現状と今後について特に Lhokpu 語を中心に述べる。

## II. ブータン王国の諸言語<sup>注1)</sup>

38,394 km<sup>2</sup> という九州ほどの国土面積を有するブータン王国は、言語的に多様性に富んでいる。英語を含めると実に 20 以上もの言語が話されている。英語と並んで公用語であるゾンカ語やその他 2・3 の言語を除いて、言語の実態は殆ど未解明である。世界で十指に満たない数しかいないブータン言語の研究者で手分けして研究を連携し

て行っている。文化史や地域文化に関する文献資料の少ないブータンにおいて、現在の言語分布を詳細に分析することは、民族移動や民族の歴史的分布を解明するための重要な手がかりである。

チベット=ビルマ言語学の泰斗 George van Driem による van Driem (1991) の出版以前はブータン王国の諸言語についてのまとまった記述は皆無であった。現在ブータン王国では確認できる限り 18 言語が分布している。その後刊行された van Driem (1998, 2001) によればブータン王国の諸言語は下記のように分類される<sup>1)</sup> (言語分布は図 1 を参照) :

- ・ Central Bodish (中央ボディッシュ) : Dzongkha, Cho-ca-nga-cakha, Lakha, Brokpa, Tibetan, Brokkat
- ・ East Bodish (東ボディッシュ) : Kheng, Bumthang, Dzala, Kurtöp, Mangdebi-kha, Chali, Black Mountain, Dakpa
- ・ Other Tibeto-Burman Languages (その他のチベット=ビルマ系諸語) : Tshangla, Lhokpu, Gongduk, Lepcha
- ・ Indo-Aryan Language (インド=アリア諸語) : Lhotsamkha (Nepali)



図1 ブータン王国及び周辺言語の分布図<sup>注2)</sup>

ブータン王国の言語別話者人口に関するセンサスを纏めると以下ようになる：

言語名	van Driem (1991)	PHCB (2005)	GNH (2008)
Dzongkha	160,000	146,681	156,206
Cho-ca-nga-ca-kha	20,000	12,065	48,894
Lakha <sup>注3)</sup>	8,000	-	-
Brokpa <sup>注4)</sup>	5,000	-	-
Tibetan	1,000	1,270	1,270
Brokkat <sup>注5)</sup>	300	-	-
Kheng <sup>注6)</sup>	40,000	34,924	60,958
Bumthang <sup>注7)</sup>	30,000	12,065	26,669
Dzala <sup>注8)</sup>	15,000	4,445	15,875
Kurtöp <sup>注9)</sup>	10,000	18,414	12,065
Mangdebikha	10,000	5,080	4,445
Chali <sup>注10)</sup>	1,000	1,905	635
Black Mountain <sup>注11)</sup>	1,000	-	-
Dakpa	1,000	635	1,270
Tshangla	138,000	173,350	236,848
Gongduk <sup>注12)</sup>	2,000	-	-
Lepcha	2,000	-	-
Lhokpu	-	2,540	8,890
Lhotsamkha (Nepali)	156,000	132,711	54,608
Kurux	-	1,905	635

ブータン諸語の話者人口<sup>注13)</sup>

### Ⅲ. Lhokpu語について

#### 1. はじめに

本章では、ブータン王国チュカ (Chukha) 県ターバ (Tāba) 村で行われている Lhokpu 語ターバ方言についての初歩的調査の結果を報告する。当該言語はネパール語話者により Lhokputram, Ngāntram 乃至はゾンカ語話者による他称である Lhobikha (ལོབིཀཱ) と称されてきた。而るに発表者の調査により、この言

語の母語話者は自身の言語を Doyap 乃至は Lhokpu と呼んでいることが確認された。本稿で考察するのは、この言語の母語話者の文化的背景及び音韻体系である。筆者は2013年12月から2017年9月にかけて断続的に、ブータン王国チュカ県ブンツォリンにおいて当該言語の基礎語彙及び文法調査を行った。本稿はその調査結果の報告として音声・音韻及び中核語彙の記述・分析を目的とするものである。短期間の調査で語数も1500と限られているため、試論に過ぎないことをお断りしておく。

#### 2. Lhokpu 語の背景

##### 1) 系統・分布・自称について

Lhokpu 語の系統は未だ詳らかでないが、シナ=チベット語族、チベット=ビルマ語派、西部チベット=ビルマ語群、チベット語支 (Sino-Tibetan, Tibeto-Burman, Western Tibeto-Burman, Bodish) であることは音韻・形態・統語の面からも確実であると言える。Lhokpu 語はブータン王国サムツィ県東北部2村 (Tāba 村, Dramding 村) 並びに北部4村 (Lotukuchu 村, Sanglung 村, Satakha 村, Lotok 村) に分布している。Tāba 村及び Dramding 村の居住者は Doyap と称されている。Lotukuchu 村の居住者は Binchat と呼ばれ、更に高地居住者の Rosant と低地居住者の Leysant に分けられるが言語的な差異は無いと考えられる。Satakha 村の居住者は Satank または Danchat,

Sanglung 村の居住者は Guchat と其々称される。ターバ村及びダムディン村の Lhokpu 語話者の自称は [dojap] であるが、北部4村では [ɬokpu]/lhok.pu/ である。またそれぞれの村名が言語名を示す場合もある。

## 2) 帰属意識

Aris (1979: xviii) が述べているように、Lhokpu 語話者は古代から現在のブータン王国のムジャン (Gdung-rab- 'byams) によって統治されていたと考えられる。伝承に拠れば、Lhokpu 語話者が 17 世紀にブータンを統一したシャブドゥン＝ンガワン＝ナムギェル (Zhabs-drung-ngag-dbang-rnam-rgyal) をチベットから招聘した、と強く信じている<sup>注14)</sup>。男性の民族衣装であるパキ (pakhi) との類似から、レブチャ族との関連を主張する母語話者も存在する。Lhokpu 語話者はブータン仏教のニンマ派を信仰している。

## 3) 本研究の調査地点・コンサルタント

本稿にかかる研究の調査地点は、ブータン王国チュカ (Chhuka) 県プントォリン (Phuntsholing) ターバ (Tāba) 村 (N 26°87', 35.17", E 89°37', 95.51", 高度:284m) である。調査協力者 (language consultant) としてターバ村生まれで Lhokpu 語の生え抜きである Dawa 氏 (1969 年生、男性) にご協力頂いた。同氏は日常的にこの言語を使用している。同氏の第一言語である Lhokpu 語の他に、ゾンカ語、ホツァムカの会話能力を有する。

## 4) 典型的特徴

Lhokpu 語は膠着語で SO/AOV の構成素順序を有

する。しかしながら、述語動詞が文末に立つという厳格な文法的制約に違反しない限り、その他の構成要素の順序はかなり自由である。形態統語論に関しては、概ねチベット語諸方言 (中央方言・アムド方言・カム方言) とパラレルであるが、動詞語幹の中にはチベット語とは明らかに系統を異にするものが存在し、また述語形式 (助動詞) や助詞の中にはチベット語の最も古い形式と同定できるものもあり、また、epistemic verbal category には非常に興味深い現象を有する言語であるので、この分野では非常に貴重なデータを提供してくれる言語である。

Lhokpu 語は典型的な後置詞言語であり主なものとして、処格 <lu> (location, direction, purpose of action and possessor of object)、奪格 <ne> (source and the starting point)、属格・具格 <gi> (the agent or the instrument, the reason, possession) 与格 <na>、比較格 <le> などが挙げられる。

## 3. 共時的音韻論

### 1) 音節構造

音節構造は以下の如くである：

(C1) (C2) V (C3) / T

(C1= 音節初頭子音, V = 音節主核母音,

C2 = 音節末子音, T= トーン)

以下では、これらの成分の位置にどのような音素が立ちうるか、またそれらの音価を検討してゆく。

### 2) 頭子音

子音音素は以下の如くである：

		labial	alveolar	retroflex	alveo-palatal	palatal	velar	glottal
stops	Unaspirated	p	t	ʈ		c	k	
	Aspirated	ph	th	ʈh		ch	kh	
	Voiced	b	d	ɖ		ʃ	g[ɣ]	
affricates	Unaspirated		ts		te			
	Aspirated		tsh		teh			
	Voiced		dz		dz			
fricatives	Unaspirated		s		e			h
	Voiced		z		z			ɦ
nasals	Voiced	m	n			ɲ	ŋ	
laterals	Voiced		l					
	Voiceless		ɭ					
approximant	Voiced		r[ɹ]					
	Voiceless		r[ɹ]					
glides	Voiced	w				j		

表2 Lhokpu 語の子音音素

3) 母音

母音音素は以下の如くであり、一部長短の対立及び鼻母音がある。各ペアともに、長母音の方が短母音よりも舌の位置が若干高い。

短母音	長母音	鼻母音
i y u	i: y: u:	ĩ ỹ ũ
e ø o	e: ø: o:	ẽ õ õ
ɛ	ɛ:	ẽ
a[a]	a:[a:]	ã[ã]

図2 Lhokpu 語の母音音素

4) トーン

Lhokpu 語には高調 (high tone) と低調 (low tone) の音韻論的対立が認められる。また contour tone として高昇調 (rising tone) が観察される。また高調の異声調 (allotone) として、形態素境界では下降調 (falling tone) が現れる ([55] → [53] or [54] / \_\_\_ #)。ストレスや発声様式 (phonation type) といった超分節音素はこの言語では弁別的ではない。音声レベルでは促声調にも高昇調が存在する。

頭子音における摩擦音・鼻音・側面音・接近音・半母音と高調・高昇調との共起関係は以下の如くである：

頭子音	高調	低調	高昇調
無声摩擦音	✓		✓
有声摩擦音		✓	✓
側面摩擦音	✓		
無声声門摩擦音	✓		
鼻音	✓		✓
側面音	✓		✓
接近音			✓
半母音	✓		✓

表2 Lhokpu 語の頭子音とトーンの共起関係

複音節語は第一音節が高調の場合は後の音節は低調に、第一音節が低調の場合は第二音節が高調になり第三音節は低調になる。

高低調の対立発生の過程を歴史的來源からみると、その音韻的条件は以下のように纏められる<sup>注15)</sup>。

高調 : C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>C<sub>3</sub>(C<sub>3</sub> = nasal/w/l/r/j) or C<sub>3</sub>[-vd]

低調 : C<sub>3</sub> (= nasal/w/l/r/j) or C<sub>3</sub>[+vd]

音節頭子音	C <sub>3</sub> [-vd]	C <sub>3</sub> = nasal/w/l/r/j	C <sub>3</sub> [+vd]
	C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -		#
音節末子音	高調		低調

図3 トーンの史的発展

4. Lhokpu 語の中核的語彙

本節では Lhokpu 語の中でも中核的と見做される語彙を挙げ、同源と見做し得る形式を有する言語との対照を行う。方法論としては、西田 (2018)<sup>2)</sup> で採用したものを扱う。具体的に挙げる語彙は以下の如くである：

- ・「二人称代名詞」 khyed/khyod > na<sup>H</sup> < PTB (チベット = ビルマ祖語<sup>注16)</sup>) \*naŋ & \*na
- ・「血」 khrag > sa<sup>H</sup> < PTB \*s-hyway-t
- ・「髪」 skra > pu<sup>H</sup> sam<sup>L</sup> < PTB \*s-hyway-t
- ・「足」 rkang ba > kur<sup>L</sup> siŋ<sup>H</sup> < PTB \*r-kaŋ & \*keŋ
- ・「水」 chu > tci<sup>H</sup> ou<sup>L</sup> < PTB \*ti(y)
- ・「七」 bdun > nit<sup>H</sup> pu<sup>L</sup> < PTB \*s-ni-s
- ・「1 人称単数」 ka<sup>H</sup>
- ・「2 人称単数」 na<sup>H</sup>
- ・「3 人称単数」 m. mo<sup>H</sup> za<sup>H</sup> / f. me<sup>H</sup> tsan<sup>H</sup>
- ・「1 人称複数」 kai<sup>H</sup> ta<sup>H</sup>
- ・「2 人称複数」 kai<sup>H</sup> jo<sup>L</sup> do<sup>L</sup> ma<sup>L</sup>
- ・「3 人称複数」 k<sup>h</sup>o<sup>H</sup>k<sup>h</sup>e<sup>H</sup>

1. 「二人称代名詞」 khyod > na<sup>H</sup>

本語彙は PTB (チベット = ビルマ祖語) naŋ & na に遡ることが可能である。周辺諸語及び同源形式と見做し得るものは以下の如くである：

Sulung [Puroik]	nah <sup>53</sup>	Sun, Hongkai et al. 1991. <sup>3)</sup>
Apatani	nó	Sun, Tianshin. 1993. <sup>4)</sup>
Damu	no:	Sun, Tianshin. 1993.
Chin	naŋ	VanBik. 2009. <sup>5)</sup>
Garó	na <sup>?</sup> a	LaPolla. 1987. <sup>6)</sup>
Tshangla (Motuo)	nan	Sun, Hongkai et al. 1991.
Trung [Dulong]	na <sup>53</sup>	LaPolla. 1987.
rGyalrong	na	Nagano. 2013. <sup>7)</sup>

2. 「血」 khrag > sa<sup>h</sup>

本語彙は PTB s-hyway-t に遡ることが可能である。周辺諸語及び同源形式と見做し得るものは以下の如くである：

Darang	sa:	Matisoff. 1987. <sup>8)</sup>
Tiddim	si <sup>1</sup> san <sup>2</sup>	Bhaskararao. 1996. <sup>9)</sup>
Sangtam	shü	Marrison. 1967. <sup>10)</sup>
Jingpho	sai	Benedict. 1972. <sup>11)</sup>
Pumi	sa <sup>13</sup>	Huang and Dai. 1992. <sup>12)</sup>
Lhasa	tsha <sup>253</sup>	
Spiti	tsà	Bodh. 1991. <sup>13)</sup>

3. 「髪」 skra > pu<sup>h</sup> sam<sup>l</sup>

本形式は意味的には「FEATHER / WING / HAIR + HAIR」を起源とするものと考えられる。周辺諸語及び同源形式と見做し得るものは以下の如くである：

## FEATHER / WING / HAIR

Tibetan (Lhasa)	pu <sup>53</sup>	
Thakali	ˈpuh-cham	Matisoff. 1987.
Kanauri	spū	Bailey. 1911. <sup>14)</sup>
Tshangla	pu	Sun, Hongkai et al. 1991.
rGyalrong	spə	Nagano. 2013.
Tangut [Xixia]	pci <sup>2</sup>	Sofronov. 1978. <sup>15)</sup>
Nasu	na <sup>21</sup> bu <sup>21</sup> ts <sup>h</sup> e <sup>21</sup>	Chen. 1986. <sup>16)</sup>

## HAIR

Galo	sam nam	Das Gupta. 1963. <sup>17)</sup>
Kaman [Miju]	ɛcm <sup>55</sup>	Sun et al. 1980. <sup>18)</sup>
Chin	sham	VanBik. 2009.
Tiddim	sam <sup>l</sup>	Bhaskararao. 1996.
Lai (Falam)	sám	VanBik. 2009.
Lotha Naga	o <sup>l</sup> -həm <sup>3</sup>	Bruhn. 2014. <sup>19)</sup>

4. 「足」 rkang ba > kur<sup>l</sup> siŋ<sup>h</sup>

本語彙の第一音節は PTB \*r-kaŋ ɹ \*keŋ に遡ることが可能である。周辺諸語及び同源形式と見做し得るものは以下の如くである：

Bodo	kura	Bhat. 1968. <sup>20)</sup>
Pattani	thurudrò	Sharma, S.R. 1991. <sup>21)</sup>

第二音節の形式と同源と見做し得るものは以下の如くである：

Wancho	šia	Benedict. 1972.
Tsangla (Motuo)	tɕ <sup>4</sup> i <sup>55</sup> tsi <sup>55</sup>	Zhang. 1986. <sup>22)</sup>

上古漢語でも以下のような形式を再建することが可能であり、本形式の第二音節と関係があると考えられる：

siŋ <sup>註18)</sup>	tree / wood	Chou. 1972. <sup>23)</sup>
syŋg	wood / firewood / tree	Coblin. 1986. <sup>24)</sup>

5. 「水」 chu > tɕi<sup>h</sup> ou<sup>l</sup>

本形式は意味的には「WATER + WELL」を起源とするものと考えられる。本語彙の第一音節は PTB\* ti(y) に遡ることが可能である。周辺諸語及び同源形式と見做し得るものは以下の如くである：

Bokar	fiu teir	Huang and Dai. 1992.
Darang	mɔ <sup>31</sup> tɕi <sup>53</sup>	Huang and Dai. 1992.
Idu	thu <sup>55</sup> tɕi <sup>53</sup>	Sun, H. 1991.
Pumi	nə <sup>13</sup> tɕi <sup>55</sup>	Huang and Dai. 1992.

第二音節の形式と同源と見做し得るものは以下の如くである：

Lepcha	uŋ	
Tiddim Chin	wa:ŋ	‘well’
PTB	*dwa:ŋ	‘well’

6. 「七」 bdun > nit<sup>h</sup> pu<sup>l</sup>

本語彙の第一音節は PTB s-ni-s に遡ることが可能である。周辺諸語及び同源形式と見做し得るものは以下の如くである：

Padam-Mishing	ki-nit	Sun. 1993.
Central Naga	th-ni(t)	Bruhn. 2014.
*TGTM <sup>註17)</sup>	B <sup>h</sup> nis, B <sup>h</sup> nis	Mazaudon. 1994. <sup>25)</sup>

第二音節の形式と同源と見做し得るものは以下の如くである：

Bokar a-bor Sun. J. 1993.  
Galo bor GLDC. 2009.<sup>26)</sup>

<daŋ? and Tibetan  
a-taŋ plural marker Apatani Sun J 93  
ta'c'haŋ we, us [plural] rGyalrong (Jinchuan  
Jimu Zhouchan) Nagano 2013

## 7. 人称代名詞

Lhokpu 語の人称代名詞は以下の如くである：

「1 人称単数」 ka<sup>H</sup>  
「2 人称単数」 na<sup>H</sup>  
「3 人称単数」 m. mo<sup>H</sup> za<sup>H</sup> / f. me<sup>H</sup> tsan<sup>H</sup>  
「1 人称複数」 kai<sup>H</sup> ta<sup>H</sup>  
「2 人称複数」 kai<sup>H</sup> jo<sup>L</sup> do<sup>L</sup> ma<sup>L</sup>  
「3 人称複数」 kho<sup>H</sup> khe<sup>H</sup>

5) 「2 人称複数」 kai<sup>H</sup> jo<sup>L</sup> do<sup>L</sup> ma<sup>L</sup>  
本形式の第二音節以下は「all」に当たる形式であると見做し得る。

joŋs all / whole, the Tibetan (Written)  
jammai all Nepali  
kōm-dòm all, everything Jingpho

### 1) 「1 人称単数」の形式 ka<sup>H</sup>

本形式は PTB\*ŋa-y ≍ \*ka (I/ME / 1st p. PRONOUN) に廻り得る。チン語やライ語でも以下のような形式が見られる：

kay ≍ kay-ma? Chin VanBik 2009  
káy ma? Lai (Falam) VanBik 2009

### 6) 「3 人称複数」 k<sup>H</sup>o<sup>H</sup>k<sup>H</sup>e<sup>H</sup>

本形式はチベット = ビルマ諸語に広くみられる形式と同一形式である。

khonj<sup>55</sup>, khō<sup>53</sup>, kho<sup>53</sup>, khuŋ<sup>55</sup> Tibetan (Lhasa)  
khuni they Limbu  
Michailovsky 1989

### 2) 「2 人称単数」 na<sup>H</sup> (註 19)

本形式は PTB\*na-ŋ (YOU / THOU / 2ND PERSON PRONOUN) に廻り得る。

njaŋ you / thou \*Sino-Tibetan Coblin 1986.  
naŋ thou \*Tibeto-Burman Weidert 1987.<sup>27)</sup>  
naŋ thou \*Tibeto-Burman Benedict 1972.  
naŋ thou \*Tibeto-Burman Chou 1972.  
na:ŋ thou \*Tibeto-Burman French 1983.<sup>28)</sup>

### 3) 「3 人称単数」の形式 m. mo<sup>H</sup> za<sup>H</sup> / f. me<sup>H</sup> tsan<sup>H</sup>

本形式と同源と見做し得るものは以下の如くである：

mó he / she Apatani Sun J 1993.  
<sup>2</sup>tsa that / he Gurung Mazaudon 1994.  
amtsam he [能格] Bahing Michailovsky 1989.<sup>29)</sup>

### 4) 「1 人称複数」 kai<sup>H</sup> ta<sup>H</sup>

本形式の第二音節は「and, with」に当たる形式乃至は複数標識であると見做し得る。

## 8. 数詞

ブータン諸語は数詞に 20 進法 (vigesimal system) を用いることが特徴的である。Lhokpu 語の基数詞は以下の如くである (註 20)：

・ 0 le <sup>H</sup> kor <sup>L</sup> < ゾンカ語	11 teu <sup>H</sup> ci <sup>L</sup> te <sup>L</sup> < ゾンカ語
・ 1 it <sup>H</sup> pu <sup>H</sup>	12 teu <sup>H</sup> ŋi <sup>H</sup> < ゾンカ語
・ 2 ŋi <sup>H</sup> pu <sup>H</sup>	20 it <sup>H</sup> kal <sup>L</sup> < bo <sup>L</sup> -kal (Tamang)
・ 3 sum <sup>H</sup> pu <sup>H</sup>	21 it <sup>H</sup> kal <sup>H</sup> il <sup>H</sup> lhik <sup>L</sup> (系統不明)
・ 4 dzi <sup>H</sup> li <sup>H</sup> pu <sup>H</sup> < li (Limbu)	22 it <sup>H</sup> kal <sup>H</sup> ŋil <sup>H</sup> lhik <sup>L</sup>
・ 5 hā <sup>H</sup> pu <sup>H</sup>	23 it <sup>H</sup> kal <sup>H</sup> sum <sup>H</sup> lhik <sup>L</sup>
・ 6 tu <sup>H</sup> pu <sup>H</sup>	30 phe <sup>H</sup> daŋ <sup>H</sup> nix <sup>H</sup> kal <sup>L</sup> < phet (Lepcha)
・ 7 nit <sup>H</sup> pu <sup>H</sup>	40 nix <sup>H</sup> kal <sup>L</sup>
・ 8 get <sup>H</sup> pu <sup>H</sup>	50 phe <sup>H</sup> daŋ <sup>H</sup> sum <sup>H</sup> kal <sup>L</sup>
・ 9 ku <sup>H</sup> pu <sup>L</sup>	60 sum <sup>H</sup> kal <sup>L</sup>
・ 10 tek <sup>H</sup> pu <sup>L</sup> < chek (Atong)	80 lit <sup>H</sup> kal <sup>L</sup> < li (Limbu)
・	100 ha <sup>H</sup> hal <sup>L</sup>

## 9. 小結

本章では Lhokpu 語の音声・音韻について報告した。Lhokpu 語の音韻に関しては、語彙の精密な記述及び自然談話に観られる音調をチベット文語形式及び周辺諸言語の形式との対応関係を詳細に検討することが有効な分析方法となりうる。本

言語の音韻論・語彙の特徴は以下のように纏められる：

1. 子音音素として無声接近音が存在すること。
2. 母音音素すべてに長短の区別があること、また鼻母音が存在すること。
3. 一般的に文語チベット語の無声有気閉鎖音・無声摩擦音・無声ソノラントの子音は高調、有声子音は低調と共起するが、ソノラントの子音に関しては例外も存在すること。
4. 大部分の語彙形式はチベット語形式と対応するが、一部来源不明な語彙が存在すること。
5. ブータン諸語の特徴を共有（20進法、音節縮約等）すること。
6. 来源不明な数詞及び基礎語彙が散見されること。Lohorung 語、Limbu 語等と同一形式と言われてきたが、データ不足のため断定には至らないこと。

今後より多くの語例について調査し同様の分析を施すことにより、更に詳細な史的变化を辿ることが可能となると考えられる。また Lhokpu 語にみられるチベット語と酷似する形式の来源（偶然の一致であるか、同源であるか、借用語であるか、言語接触の結果であるか）を判定することが次の重要な手続きとなる。この点に関しては稿を改めて論じたい。

#### IV. 危機言語の観点から<sup>注21)</sup>

危機言語とは、政治経済的・文化的に優勢な大言語に圧倒されたり、より勢力のある周囲の言語に圧迫されたりして、いま地球上から急速に消滅しつつある諸言語のことである。グローバリゼーションの潮流はかつて人類が経験したことのない速度で、多くの危機言語を消滅へと追いやっている。この状況の中で、近年危機言語への関心が高まってきている。言語が消滅することで、少なくとも人間の文化の認識と人間社会の維持にかかわる問題が起こる事はほぼ確実である。言語の消滅に対して、言語学者としてできる最大の仕事は、もちろん危機言語の分析・記述・記録を行うことである。ここからさらに一歩を進めて、言語学者みずからが危機言語の復興保持の方向に踏み出す道も開けている。現地コミュニティの要請に応え危機言語を守るよう共に努力するというこ

とある。1990年代から広く注目されるようになった危機言語の問題は、国際先住民年(1994～2004年)を機に世界的に取り上げられるようになった。中でも特筆されるのは、ユネスコ総会(2001年)が文化の多様性を尊重する宣言を採択するとともに、この多様性こそ人類の共有財産であることをうたい、国連環境計画(UNEP)が「人間をとりまく環境や文化と密接にかかわる言語を失うことは自然の教科書を失うことだ」と警鐘を鳴らすに至ったこと。このような動きと平行して世界各地で危機言語に関する会議が開催され、その会議録が出版されている。日本人研究者もまた、2003年3月のユネスコ無形文化財局に新設された危機言語部門の活動のガイドライン作りに積極的に関与し、世界の危機言語研究者との協力関係を強めている。

#### V. おわりに

Krauss (1992) は世界の諸言語を、1)「瀕死の状態にある(moribund)」言語：子供たちがすでに学ばなくなっている言語、2)「危機に瀕した(endangered)」言語：今世紀中に子供たちが学ばなくなる可能性のある言語、3)「安泰な(safe)」言語、の3つのカテゴリーに分類した。George van Driem (私信)によれば、本稿で取り上げた Lhokpu 語の母語話者数はブータン政府の公式見解では1000人とはなっているが実際は瀕死の状態にある言語であるとのことである。

ブータン王国には、未だ学術的研究が十分に進んでいない諸言語が数多く存在する。ブータン諸語は南部の Lhotsamkha を除き全てシナ=チベット語族・チベット=ビルマ語派に属する。ブータン王国中部で話されている所謂ブムタン=グループの諸言語や東部で話されている諸言語はそれぞれ音韻上及び形態上の共通特徴を有しているが、シナ=チベット語族の最古層を反映していると考えられ、民族移動の観点からしてもブータン王国の諸言語の学術的価値は極めて高い。東部の一大勢力となっているツァンラ語もブータン諸語ひいては東北インドのコンテキストで検討するに値する極めて重要な言語である。ゾンカ語の方言差なども非常に重要な研究課題である。

ブータン王国における言語研究及び言語政策に関して現時点で必要性の高い課題としては以下の

ものが考えられよう：

- 1) 危機言語研究に関する国際組織との強力な連携関係の構築
- 2) 危機言語の調査研究、研究成果の出版・データベース化
- 3) 表音文字乃至はゾンカ文字を基本とした正書法 (orthography) の作成
- 4) 危機言語研究基金の設立

十分な情報を書いた (あるいは皆無の) 言語の殆どがいまや急速に消滅に向かっており、生きた言語を有効に研究できる残余期間は限られている。遅きに失することなく調査・研究の取り組みを行う必要と責務が言語学者にはあると強く考える<sup>22)</sup>。

本稿は2017年12月23日開催の第43回雲南懇話会の講演内容に基づいている。発表に際して懇話会参加者より多くの貴重なご指摘、ご意見を頂戴した。草稿の段階ではベルン大学言語学研究所のGeorge van Driem教授から多くの貴重なご助言を賜った。この場を借りて満腔の謝意を表す。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金「ブムタン諸語の記述言語学的・歴史言語学的研究」(基盤研究(C)研究課題番号:26370472,2014年度-2017年度,研究代表者:西田文信)及び「ブータン王国の危機言語マンデビ語の現地調査による記述及び形態統語論的研究」(若手研究(B)研究課題番号:23720195,2011年度-2013年度,研究代表者:西田文信)の助成を受けている。

## 注

- 1) 『ヒマラヤ学誌』第7号所収の月原(2000)<sup>30)</sup>及び野村(2000)<sup>31)</sup>は、ブータン王国の言語事情を考察する際に極めて重要となる論考である。
- 2) 日本ブータン研究所研究員高橋洋氏提供の資料による。資料を忝くした高橋洋氏には記して感謝申し上げる。この他に、ブータン王国南部にはKurux語(インド北東部ビハール州ラーンチー、中央部マディヤ・プラデーシュ州ラージガル県、東部西ベンガル州ジャルパーイーグリー県に分布するドラヴィダ系言語)が話されているが、ブータン王国の政府機関として言語研究・政策を担当しているゾンカ語開発委員会

(Dzongkha Development Commission)の発表資料には当該言語のデータが存在しない。これは、同委員会が1907年の王政移行後に移民してきた者の言語に関しては独立した言語と見做さないという原則に基づいているためである。また、同国では教育言語として英語が初等教育のクラス1に入る前に1年間の予備教育(pre-primary)のクラスから教授され、またリングア・フランカとして広く使用されている。各言語及び同国の社会言語学的な状況の概観は西田(2008)<sup>32)</sup>を参照のこと。また西田(2012)<sup>33)</sup>及び西田(2013)<sup>34)</sup>ではブータン諸語の概観した。

- 3) van Driem(1998,2001)及び図1ではSeph Brokpakhaと記した言語。
- 4) van Driem(1998,2001)及び図1ではMera Brokpakhaと記した言語。
- 5) van Driem(1998,2001)及び図1ではDur Brokpakhaと表記した言語。
- 6) van Driem(1998,2001)及び図1ではKengkhaと表記した言語。
- 7) van Driem(1998,2001)及び図1ではBumthangkhaと表記した言語。
- 8) van Driem(1998,2001)及び図1ではZalakhaと表記した言語。
- 9) van Driem(1998,2001)及び図1ではKurtoekhaと表記した言語。
- 10) van Driem(1998,2001)及び図1ではChalikhaと表記した言語。
- 11) これは言語学者が暫定的につけた地名(山名・山域名)的な言語名であり、自称・他称のいずれでもない。この言語の母語話者は「村名+mönpa」を自称として用い、言語名は「村名+mönpakha」を用いる。
- 12) van Driem 図1ではGongdukhaと表記した言語。
- 13) van Driem(1991),PHCB(2005):*Results of Population & Housing Census of Bhutan 2005*,Thimphu: Royal Government of Bhutan,GNH(2008):Sangay Chophel.2008.*Gross National Happiness 2008 survey results - Cultural Diversity and Resilience*.に基づき作成。
- 14) この伝承は史実とは異なり、実際にはニンマ派の信奉者であるLhokpu語話者が、宗派の



異なるドゥク派の座主を招聘したとは想定しにくい。

- 15)  $C_1 \cdot C_2$  は文語チベット語の音節構造における子音の配列を示す。文語チベット語の音節構造は  $((C_1)C_2)C_3(C_4)V(C_5(C_6))$  であり、音素配列は、 $C_1=b(\_/_{r, l, s})$ ,  $C_2=g, d, b, r, l, s, m, n$ ,  $f_i$ ,  $C_3=k, kh, g, t, th, d, p, ph, b, \beta, \beta h, d\zeta, ts, tsh, dz, m, n, \eta, \eta, \int, \zeta, s, z, l, r, w, j, \int, h$ ,  $C_4=l, r, w, j$ ,  $V=a, i, u, e, o$ ,  $C_5=g, d, b, m, n, \eta, r, l, s, f_i$ ,  $C_6=s(\_/_{g, \eta, b, m})$  である。
- 16) 本稿で挙げるチベット=ビルマ祖語の形式は全て Matisoff (2003)<sup>35)</sup> による。
- 17) Tamang-Gurung-Thakali-Manang から構成される言語グループを指す。
- 18) 漢語の「薪」(上古音は \*[s]i[n], 中古音は平声真韻心母開口三等息鄰切、現代音は xīn) と関連付けられる可能性がある。上古音は Baxter and Sagart (2014)<sup>36)</sup> に拠る。
- 19) ゾンカ語の na は二人称単数の敬語形であるが、Lhokpu 語の na には敬語のニュアンスは含まれない。
- 20) 因みに序数詞は存在せず、基数詞が序数詞を兼ねている。1 から 10 までの数詞の第 2 音節に現れる pu<sup>h</sup> は元来序数詞に用いられた可能性はあるが、現在では基数詞の一部として捉えられる拘束形態素である。
- 21) 本章の内容は日本言語学会が提唱している危機言語に関する情報に基づく。
- 22) 言語の記録・保存に携わるものとして、以下の言葉を忘れてはならないと思う。「言語の多様性は良い、これは認めます。しかし、だからと言って、私たちがアイヌの人々に、だからあなたたちはアイヌ語を守りなさいと強制することはできないんです。アイヌ語を学びたくないという人もいます。そういう民族の中の多様性も認めていかなければならないんです。」(2001年12月2日「危機言語第2回国際学術講演会」国立京都国際会館における田村すゝ子氏の発言)。また本稿では触れられなかったが、言語多様性の現状と課題として、ゾンカ語の正書法策定、ローマ字表記の問題、英語を教育言語にした事による問題点等が挙げられるが、これらは稿を改めて論じたい。また、ブータン王国の危機言語の状況

については van Driem (2007)<sup>37)</sup> が最も詳細に論じている。

## 参考文献

- 1) van Driem, George: *Report on the first linguistic survey of Bhutan*. Thimphu: Royal Government of Bhutan. 1991.、van Driem, George: *Dzongkha*. Leiden: Research School of Asian, African and Amerindian Studies. 1998. 及び van Driem, George: *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region, containing an Introduction to the Symbiotic Theory of Language (2 vols.)*. Leiden: Brill. 2001.
- 2) 西田文信: オレカ語の言語的特徴について—音韻及び形態を中心に—. 『ブータン学研究』1: 1-22. 2018.
- 3) Sun, Hongkai. Zàngmiǎnyǔyǔyīnhécíhuìbiānxiězǔ (《藏缅语语音和词汇》编写组): 《藏缅语语音和词汇》北京: 中国社会科学出版社. 1991.
- 4) Sun, Jackson Tianshin: *Tani synonym sets*. (unpublished ms.) 1993.
- 5) VanBik, Kenneth: *Proto-Kuki-Chin: A reconstructed ancestor of the Kuki-Chin languages*. (STEDT Monograph Series #8). Berkeley, CA: STEDT. 2009.
- 6) LaPolla, Randy J.: *Dulong and Proto-Tibeto-Burman*. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 10.1:1-43. 1987.
- 7) Nagano, Yasuhiko and Prins, Marielle (eds.): *rGyalrongic Languages Database*. Osaka: National Museum of Ethnology. 2013.
- 8) Matisoff, James A.: *Body part card file*. (unpublished ms.) 1987.
- 9) Bhaskararao, Peri: *Phonetic documentation of endangered languages: Creating a knowledgebase containing sound recording, transcription and analysis*. *Acoustical Science and Technology*. 25, 4, 219-226. 2004.
- 10) Marrison, Geoffrey Edward.: *The classification of the Naga Languages of north-east India*. Ph.D. Dissertation, School of Oriental and African Studies, University of London. 1967.
- 11) Benedict, Paul K.: *Sino-Tibetan: A conspectus*.

- (Princeton-Cambridge Series in Chinese Linguistics, #2). New York: Cambridge University Press. 1972.
- 12) Huang Bufan and Dai Qingxia, eds.: 《藏緬語族語言詞匯》北京: 中央民族大学出版社. 1992.
- 13) Bodh, Sri Chhimed: *Body Parts Questionnaire (Spiti)*. (unpublished ms.) 1991.
- 14) Bailey, Thomas Grahame: *Kanauri vocabulary in two parts: English-Kanauri and Kanauri-English*. (RAS Monograph 13). London: Royal Asiatic Society. 1911.
- 15) Sofronov, Mikhail Viktorovich: Annotations to analysis of the Tangut script. 1978.
- 16) Chen Kang.: *Body Parts Questionnaire (Loloish)*. (unpublished ms.) 1986.
- 17) Das Gupta, Kamallesh: *An introduction to the Gallong language*. Shillong: Philological Section, Research Department, North-East Frontier Agency. 1963.
- 18) Sun Hongkai, Lu Shaozun, Zhang Jichuan and Ouyang Jueya, eds.: (孫宏開・陸紹尊・張濟川・歐陽覺堃編。《門巴, 珞巴, 僜人的語言》北京: 中国社会科学出版社. 1980.
- 19) Bruhn, Daniel W.: *A phonological reconstruction of Proto-Central Naga*. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley. 2014.
- 20) Bhat, D. N. Shankara: *Boro vocabulary (with a grammatical sketch)*. Poona: Deccan College Postgraduate and Research Institute. 1968.
- 21) Sharma, Suhnu Ram: *Body Parts Questionnaire (Manchati)*. (unpublished ms.) 1991.
- 22) Zhang Jichuan (張濟川) 編: 《仓洛门巴語簡志》北京: 民族出版社. 1986.
- 23) Chou Fa-kao. (周法高): 「上古漢語和漢藏語」《香港中文大學中國文化研究所學報第5卷第1期》159-237. 1972.
- 24) Coblin, Weldon South: *A sinologist's handlist of Sino-Tibetan lexical comparisons*. (Monumenta Serica Monograph Series, 18). Nettetal: Steyler Verlag. 1986.
- 25) Mazaudon, Martine. 1994. *Problèmes de comparatisme et de reconstruction dans quelques langues de la famille tibéto-birmane*. Thèse d'Etat, Université de la Sorbonne Nouvelle. 1994.
- 26) GLDC: *Galo-English dictionary, with English-Galo index [International Edition]*. Itanagar, Arunachal Pradesh, India: Galo Welfare Society. 2009.
- 27) Weidert, Alfons K. *Tibeto-Burman tonology: A comparative account*. (Current Issues in Linguistic Theory, Vol. 54). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Co. 1987.
- 28) French, Walter T. *Northern Naga: A Tibeto-Burman mesolanguage*. Ph.D. Dissertation, The City University of New York. 1983.
- 29) Michailovsky, Boyd: Limbu. Electronic ms. 1989.
- 30) 月原敏博: カルチュラル・ティベタンの言語文化と教育—ブータンの個性にもふれて—。『ヒマラヤ学誌』7: pp.79-91. 2000.
- 31) 野村亨: ブータン王国における言語の状況: その歴史と現状。『ヒマラヤ学誌』7: pp.93-114. 2000.
- 32) 西田文信: ブータン王国の言語政策—現状と課題—。日本語政策学会第10回大会奈良教育大学. 2008年11月9日.
- 33) 西田文信: 変わるブータン, 変わらぬブータン。ブータンシンポジウム招待講演。JICA研究所. 2012年12月16日.
- 34) 西田文信: ブータン諸語の記述・歴史言語学的研究の現状。『秋田大学教養基礎教育研究年報』15: 75-82. 2013.
- 35) Matisoff, James A.: *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press. 2003.
- 36) Baxter, William H., and Laurent Sagart: *Old Chinese: a new reconstruction*. New York: Oxford University Press. 2014.
- 37) van Driem, George: Endangered Languages of South Asia. In Matthias Brenzinger, ed. *Handbook of Endangered Languages*. Berlin: Mouton de Gruyter. pp. 303-341. 2007.



モチュ (Mochu, Moti, Tursā Kholā)



Lhokpu 語話者居住地



Lhokpu 語話者ご一家



Lhokpu 語調査の一コマ



Brokkat 語話者の Nenten さん



Brokkat 語話者の Dorji 君



お世話になっているイエシさんご一家と



Mangdebhi 語調査の一コマ



## Summary

### **Languages in the Kingdom of Bhutan —Linguistic Diversity: With Special Reference to the Lhokpu Language—**

Fuminobu Nishida

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

Linguistically speaking, Bhutan is full of diversity with more than 19 languages spoken in this country. This linguistic diversity can be attributed to Bhutan's geographical location with its deep valleys and high mountain passes. Nowadays, strictly speaking, almost all languages in this country are endangered. This paper presents the Lhokpu phonetic description and its phonological analysis as well as lexical comparison with Proto-Tibeto-Burman forms. The language data, collected during the author's visit to the village of Tâba between 2013 and 2017, are of a speaker from Tâba village, Chhuka district. The estimated number of native speakers of this language is approximately 1,000 according to Dzongkha Development Commission.

The syllable canon is (C1) (C2) V (C3) / T. The minimum syllable type is a single vowel, such as one of the forms for the word for /a/ 'interjection'. Although a glottal stop frequently appears at the beginning of a syllable beginning with no consonant, there is no phonemic contrast between vocalic onset and glottal onset.

Lhokpu has 35 consonants at six points of articulation, plus consonant clusters, both initial and final position. Unlike most Tibeto-Burman languages, Lhokpu has many consonant finals, including clusters, due to the collapsing of two syllables into one. The phonetic characterisation of Lhokpu consonant and vowel phonemes is listed in this paper.

The initial analysis of core vocabulary of Lhokpu is demonstrated for the purpose of historical-comparative linguistics research in the context of Tibeto-Burman.

Lastly but not least, the problems of endangered languages will be dealt with.